絵画にみる鳴門海峡の風景認識の変遷に関する研究

A Study on the Historical Change of Landscape Recognition in Naruto Strait Based on Paintings

大平 和弘* 藤本 真里** 福本 優* 赤澤 宏樹**

Kazuhiro OHIRA Mari FUJIMOTO Yu FUKUMOTO Hiroki AKAZAWA

Abstract: Naruto Channel located at the edge of Awaji Island and Shikoku is a scenic beauty known for whirlpools. In this study, we considered the historical change of landscape recognition of Naruto Strait based on the analysis of paintings. We analyzed 56 paintings drawn at the present since the Edo period. As a result of analyzing the composition of paintings and the viewpoint on which paintings were drawn, the paintings were divided into four periods. And, as a result of extracting landscape elements and actual landmarks around the Naruto Strait from paintings, we considered the following the landscape recognition. In the first period, the panoramic landscape that depicts a lot of landscape elements in a wide area was mainstream. In the 2nd period, the image of the picturesque landscape of whirlpools was established. The 3rd period was the times of exploring new natural landscape images with the theme at the center of the frame. In the 4th period, there were many landscapes that focused on the dynamic whirlpools from the ship.

Keywords: *painting, landscape recognition, viewpoint, Naruto strait*

キーワード: 絵画, 風景認識, 視点場, 鳴門海峡

1. はじめに

(1) 背景および目的

鳴門海峡は、淡路島南西端（兵庫県南あわじ市）と四国の北東端（徳島県鳴門市）との間に位置し、太平洋と瀬戸内海をつなぐ幅約1.3kmの海峡で、独特の地形と激しい潮流が生み出す渦潮とともに、多くの絵画や文学等の題材として親しまれてきた。古くは歌川広重の六十余州名所図会（1853～1856年）、日本八景（1927年）や新日本百景（1957年）、平成百景（2009年）等にも繰り返し選定されてきたわが国有数の景勝地であり、1931年に名勝指定（徳島県側）、1952年に瀬戸内海国立公園に編入された。近年、地域振興に向けた世界遺産登録への機運の高まりから、鳴門海峡の渦潮の世界遺産登録を目指す「兵庫・徳島「鳴門の渦潮」世界遺産登録推進協議会」が2014年に発足し、鳴門海峡や渦潮の自然的・文化的価値の両側面からの学術調査が進められつつある¹⁾。この中で、鳴門海峡の類まれな自然美としての価値証明や、登録区域・構成資産等の検討においては、過去から現在に至る鳴門海峡の風景の価値認識の変化や、一体的な風景として認識される地理的範囲に関する多面的検討が求められている¹⁾。本研究では、絵画として描かれた鳴門海峡の風景に着目し、描かれた要素や視点場、地理的な認識範囲から、鳴門海峡における風景認識の特徴とその変遷について明らかにすることを目的とする。

(2) 研究の位置づけ

これまで、鳴門海峡の風景や景観を扱った研究事例はなく、鳴門海峡の絵画に関する研究としては、近世絵画に描かれた鳴門海峡について論じた絵画史的報告書²⁾、鳴門海峡や渦潮に関する文学・芸術を収集した文献³⁾のほかは、特定の絵師の美術史的研究に解説がみられる⁴⁾程度である。また、絵画に描かれた要素や空間構成から風景の認識や変遷等を読み説いた研究として、江戸名所や富士山・筑波山を対象としたもの⁵⁻⁷⁾など研究の蓄積がみられるが、海峡や海岸風景を主として扱ったものは存在せず、研究事例の蓄積が求められる。

2. 研究方法

対象とした絵画は、先行研究・文献²⁻⁴⁾に記載のある絵画、Cinii（国立情報学研究所）および国指定文化財等データベース（文化庁）において「鳴門」のキーワード検索で抽出した絵画から、制作年代と構成要素の分析に耐え得る精度の画像が得られた56件を選定した（制作年代は江戸中期の1735年から現代の1969年までとなった）。まず、描写手法を整理するため、絵画の構図と視点位置を整理した。構図は、図-1のようにパノラマ的に全景を写実した「全景構図」と主題とする対象物を絞り込んだ「主題構図」に分類し（主題の対象についても抽出）、視点位置は対象との位置関係で「俯瞰」と「水平」に分類した。次に、風景を捉えた場所である絵画の視点場を、描かれた山や岬・島影などの位置関係から、現地調査およびGoogle Earth Proの航空写真と地形表示機能により特定し、地図上に図示した。これら構図・視点位置・視点場の結果より時代的傾向を検討し、56件を制作年代順に「第1期」「第2期」「第3期」「第4期」の4つに時期区分した。続いて、時期区分ごとに捉えられた風景の特徴を読み解くため、描かれた風景の構成要素を、「土地構成要素（山、岩、岬・入江、浜、島）」「海面描写（渦、湧昇渦、白波、うねり、風浪、水位差）」「人工物（帆船、木船、汽船、街道、集落、茶屋、神社・鳥居、その他）」「人物（漁師、旅人、宴、その他）」「動植物等（黒松、その他樹木、草、鳥、怪異）」「空（雲・太陽）」の30種に分類抽出し、時期区分ごとに描写頻度を求めた。また、描かれた風景の地理的な認識範囲を把握するため、範囲を特定する上で目印となり得る実在する土地構成要素を「ランドマーク」として捉え、「山（諭鶴羽山、行者ヶ嶽、うずの丘、大毛山、先山、大麻山、芙蓉山、天円山）」「岩（中瀬、烏帽子岩、夫婦岩）」「岬・入江（門崎、銚子口、行者ヶ鼻、孫崎、押登岬、鰐崎、福良湾、潮崎、紀州、大磯崎、島田岬、椿泊岬）」「浜（千鳥ヶ浜、相ヶ浜、大毛島海岸）」「島（裸島、飛島、大園島、網干島、沖ノ島、弁天島、沼島、小豆島、伊島）」の35地点を絵画より抽出した。さらに、時期区分ごとの

*兵庫県立人と自然の博物館

**兵庫県立大学 自然・環境科学研究所

図一 全景構図（左：淡路国名所図会 No. 23・部分）と主題構図（右：六十余州名所図会 No. 26）の例

表一 絵画の分析結果と時期区分

時期区分	No.	年代	題	書誌名	絵師・画家	構図			視点位置		視点場										構成要素数	ランドマーク数		
						全景構図	主題構図	主題対象	俯瞰	水平	鳴門山	徳島側					淡路側						海上	不明
												お茶園	裸島正面	千畳敷	その他徳島	門崎	行者嶽	その他淡路						
第1期	1	1735	鳴門図	絵本和比事	西川祐信	●	人物等		●										●	9	0			
	2	1771	鳴門海月之図	敵島絵巻鑑	藤原惇則	●	白波・岩		●									●	5	0				
	3	1796	大毛山望鳴門	鳴門十二勝真景図巻	鈴木芙蓉	●		●		●									13	17				
	4	1796	大磯崎	鳴門十二勝真景図巻	鈴木芙蓉	●			●				●						10	11				
	5	1796	裸島望大毛山	鳴門十二勝真景図巻	鈴木芙蓉	●			●								●		11	10				
	6	1796	裸島望門崎	鳴門十二勝真景図巻	鈴木芙蓉	●			●				●						16	10				
	7	1796	鳴門中流	鳴門十二勝真景図巻	鈴木芙蓉	●			●							●			11	7				
	8	1796	鳴門北面	鳴門十二勝真景図巻	鈴木芙蓉	●			●								●		9	9				
	9	1796	鳴門東岸	鳴門十二勝真景図巻	鈴木芙蓉	●			●								●		12	10				
	10	1797	鳴門眺景図		鈴木芙蓉	●					●								14	13				
	11	1800年以降	阿波ナル戸	中国四国名所旧跡図	西文	●					●								9	8				
	12	1800年代	鳴門		守住貢魚	●			●				●						9	13				
	13	1800年代	阿波国鳴門之図		森魚淵	●			●			●							5	7				
	14	1800年代初頭	鳴門		月園	●			●			●							7	11				
	15	1800,1802	阿波鳴門・阿波鳴門其二	山水奇観	淵上旭江	●			●										16	22				
	16	1814	鳴門真景	阿波名所図会	探古室墨海	●			●										19	15				
	17	1815	鳴門図	阿波志	阿波藩絵師	●			●									●	6	12				
	18	1817	阿波の鳴門	北斎漫画	葛飾北斎	●	白波・岩		●										4	0				
	19	1823	鳴門の渦潮	日本	シーボルト(著者)	●			●				●						9	8				
	20	1833	鳴門眺望之景	四国遍路道中雑誌	松浦武四郎	●			●		●								10	14				
	21	1836	阿州鳴門図 其一其二	莫逆閑友	長谷川雪旦	●			●		●								11	9				
	22	1850	鳴門真景図		守住貢魚	●			●			●							18	17				
	23	1851	鳴門崎	淡路国名所図会	暁鐘成	●			●						●				12	19				
	24	1851	鳴門の海底に石鼓出現す	淡路国名所図会	暁鐘成	●	人物等		●									●	4	0				
	25	1851	武文の怨霊松浦主従を悩ませた	淡路国名所図会	暁鐘成	●	人物等		●									●	7	0				
第2期	26	1855	阿波 鳴門之風波	六十余州名所図会	歌川広重	●	渦・白波・岩		●					●					9	3				
	27	1857	阿波鳴門之風景		歌川広重	●						●							11	18				
	28	1859	阿波鳴門真景	諸国名所百景	二代歌川広重	●	渦・裸島		●		●							12	5					
	29	1862	鳴門之真景	雲錦隨筆	松川半山	●		●										12	7					
	30	明治期	日本名勝阿波鳴門之圖		不詳	●	渦・岩		●							●		11	4					
	31	1876	阿波国鳴門の風波	日本地誌略図	安藤廣重(三代)	●	渦・白波・岩		●				●					8	2					
	32	1883	皇国阿波鳴門真景之図		加野株堂	●		●					●					11	5					
	33	1892	阿波国鳴門真景		玉翠	●			●									17	18					
	34	明治30年頃	阿波鳴門	海内勝景	富岡鐘斎	●	渦・裸島		●		●							5	1					
	35	1905	阿波鳴門之図		永松春洋	●	裸島		●			●						8	4					
	36	1915	小松島・阿波鳴門図屏風		野口小菰	●		●				●						14	8					
第3期	37	大正・戦前	裸島		中川規矩磨	●	裸島		●					●					3	1				
	38	1916	鳴門	秋津百景	川端玉章	●	岩		●						●			5	9					
	39	1917	阿波の鳴門		中川八郎	●	裸島・帆船		●					●				13	8					
	40	1925	鳴門観潮画巻		湯田玉水	●	渦・その他		●									5	0					
	41	1929	鳴門		川端龍子	●	渦・その他		●								●	7	0					
	42	1929	渦まく鳴門		山元春汀	●	渦・裸島		●				●					10	2					
	43	1947	鳴門(御茶園よりの展望)		三木辰夫	●	裸島		●		●							8	3					
	44	1950	鳴門		池田遙邨	●	渦		●			●						10	4					
	45	1951	鳴門		山本柳雪	●	裸島・飛島		●			●						7	5					
	46	1951	鳴門		小糸源太郎	●	渦		●									6	1					
	47	1951	鳴門朝色		奥村厚一	●	渦・裸島		●				●					12	5					
	48	1954	鳴門		川西英	●	渦・その他		●					●				10	8					
第4期	49	1957	鳴門潮勢		野上魏	●	渦		●								●		2	0				
	50	1959	鳴門		奥村土牛	●	渦		●								●		2	0				
	51	1959	渦紋		村上凌雪	●	渦		●								●		3	0				
	52	1964	鳴門		河野太郎	●	裸島		●				●					5	2					
	53	1964	鳴門観潮		長谷川富三郎	●	渦		●							●		4	1					
	54	1965	鳴門		伊原宇三郎	●	渦		●							●		6	1					
	55	1968	鳴潮		井上速男	●	白波		●							●		4	1					
	56	1969	鳴門		稲木鳴雪	●	渦・白波・岩		●							●		4	0					

ランドマークの描写頻度を求め、ランドマークの分布から特定した風景の認識範囲を地図上に図示した。

3. 結果および考察

(1) 構図と視点場の変遷と時期区分

表-1に56件の絵画を制作年代順に示した。これより、絵画の構図については、初期は「全景構図」により全景を写實的に描き込むことが主流であったのに対し、時代が下るにつれ、渦や裸島等の対象を主題とした「主題構図」への変化がみられた。これに連動するように、視点位置についても初期は「俯瞰」が多いのに対し、1950年代後半以降は主題を「水平」に捉えた描写のみとなった。また、表-1および図-2の特定できた視点場の分布結果より、56件中半数以上の31件が徳島側の陸域が視点場となり、海上は10件、淡路側は6件と僅かであった。中でも「鳴門山展望台(9件)」からの風景は繰り返し描かれる特徴があった。一方、時代別に着目すると、視点位置の高い「鳴門山展望台」や「その他徳島」の視点場は初期に多いのに対し、時代が下るにつれ「鳴門山展望台」より低い「裸島正面」や「千畳敷展望台」、新たな視点場として淡路側の突端の「門崎展望台」などに変化し、1950年代以降のほとんどが「海上」から風景を捉えているという顕著な時代の変遷がみられた。

以上のような変遷より、風景の全景を俯瞰で捉える傾向が強い初期の25件を「第1期(No.1~25)」とし、主に渦を主題とした主題構図の登場と全景構図の終局までの11件を「第2期(No.26~36)」と区分した。続いて、新たな視点場も交えて渦や裸島などの主題を捉え、視点位置が俯瞰の終局までの12件を「第3期(No.37~48)」とし、主に渦を主題に海上から水平に風景を捉えた終盤8件を「第4期(No.49~56)」と区分できた。

(2) 時期区分別の構成要素の特徴

風景の構成要素の描写頻度を図-3に示した。その結果、構成要素を概観すると、土地構成要素は実際の海峡の環境に即して「浜」は少なくなった。海面描写では一般的に連想される渦潮の「渦」と同程度に、「白波」や海峡部の干満差である「水位差」が表現されていることが特徴的であり、人工物では「帆船」「木船」が、動植物では「黒松」が圧倒的に多く描かれ、いずれも鳴門海峡の風景を特徴づける重要な要素といえる。

一方、描写される構成要素は、時期区分ごとに大きく異なることが明らかとなった。第1期は表-1の構成要素数にみられるように、多くの構成要素を写實的に描き込み、「茶屋」や「集落」、「旅人」「宴」など鑑賞者の疑似的な画中参入を誘発することを意図した人為的要素を好んで描いていた。また怨霊などの「怪異」が描かれたことも同時期の特徴である。第2期では、「渦」や「うねり」などの躍動感ある海面描写、「帆船」や「黒松」など渦潮や鳴門海峡を特徴づける要素が繰り返し描かれていた。続いて第3期では、描かれる構成要素数が減少する反面、「水位差」や海面を

図-2 視点場の分布

よく観察しなければ描けない「湧昇渦」の写実表現に特徴を有するほか、「木船」やワカメ列の「漁師」など、時代の近代化や機械化とは逆行した郷愁の風景の要素がみられた。また第4期では、土地構成要素と海面描写以外の構成要素数が激減し、「渦」や「白波」などの渦潮を描くべき対象として捉えていたと考えられる。

(3) 風景の認識範囲とその変遷

1) ランドマークの描写頻度と認識範囲

認識範囲を特定する上で重要なランドマークの描写頻度を表-2に示した。頻度の高い傾向のあったランドマークに着目すると、海峡淡路端の「門崎(全体での描写頻度:71.4%)」、海峡中部の「裸島(64.3%)」「飛島(48.2%)」と岩礁「中瀬(46.4%)」の描写頻度が高く、これらは海峡を代表するランドマークといえる。次いで海峡の複雑な地形を表現する「銚子口(44.6%)」に加え、海峡から離れた「大園島(32.1%)」が比較的高い値であることが特筆される。大園島は一の谷の合戦後の平家が潮待ちした伝承があり、歴史認識上重要なランドマークと考えられる。さらに、山では淡路島最高峰の「論鶴羽山(21.4%)」が海峡至近の「行者ヶ嶽(21.4%)」と同程度に描かれ、地理的隔たりにより眺望の難しい「先山(10.7%)」も一定程度描かれていた。これは先山が国生み神話で最初にできた山とする伝承とともに、山頂に淡路霊場として著名な千光寺を構えることに起因すると考えられる。また、同様に眺望の難しい「紀州(12.5%)」など遠遠の陸影も眺望景の雄大さを表現する上で重要なランドマークと考えられる。このように、絵画から得られた鳴門海峡の風景の認識範囲は、地理的に認識が容易な海峡周辺部に収まらず、対象の来歴や絵師の心象も含めて捉えることの重要性を示唆している。

図-3 時期区分別の構成要素の描写頻度

表-2 時期区分別のランドマークの描写頻度

種類	記号	名 称	第1期 (N=25)	第2期 (N=11)	第3期 (N=12)	第4期 (N=8)	全体 (N=56)	度数
山	A	諭鶴羽山	32.0%	18.2%	16.7%	0%	21.4%	12
	B	行者ヶ嶽	36.0%	27.3%	0%	0%	21.4%	12
	C	うずの丘	20.0%	36.4%	0%	0%	16.1%	9
	D	大毛山	16.0%	18.2%	16.7%	0%	14.3%	8
	E	先山	16.0%	18.2%	0%	0%	10.7%	6
	F	大麻山	8.0%	9.1%	8.3%	0%	7.1%	4
	G	芙蓉山	8.0%	0%	0%	0%	3.6%	2
	H	天円山	4.0%	0%	8.3%	0%	3.6%	2
岩	I	中瀬	72.0%	45.5%	25.0%	0%	46.4%	26
	J	烏帽子岩	16.0%	0%	16.7%	0%	10.7%	6
	K	夫婦岩	12.0%	0%	0%	0%	5.4%	3
岬・入江	L	門崎	76.0%	90.9%	58.3%	50.0%	71.4%	40
	M	銚子口	56.0%	63.6%	33.3%	0%	44.6%	25
	N	行者ヶ鼻	52.0%	27.3%	8.3%	0%	30.4%	17
	O	孫崎	44.0%	36.4%	16.7%	0%	30.4%	17
	P	押登岬	40.0%	18.2%	16.7%	0%	25.0%	14
	Q	鎧崎	32.0%	9.1%	0%	0%	16.1%	9
	R	福良湾	24.0%	18.2%	8.3%	0%	16.1%	9
	S	潮崎	24.0%	18.2%	8.3%	0%	16.1%	9
	T	紀州	20.0%	18.2%	0%	0%	12.5%	7
	U	大磯崎	16.0%	0%	0%	0%	7.1%	4
	V	島田岬	4.0%	0%	0%	0%	1.8%	1
	W	椿泊岬	4.0%	0%	0%	0%	1.8%	1
浜	X	千鳥ヶ浜	36.0%	18.2%	8.3%	0%	21.4%	12
	Y	相ヶ浜	8.0%	9.1%	16.7%	0%	8.9%	5
	Z	大毛島海岸	12.0%	0%	0%	0%	5.4%	3
島	a	裸島	76.0%	72.7%	66.7%	12.5%	64.3%	36
	b	飛島	76.0%	36.4%	33.3%	0%	48.2%	27
	c	大園島	56.0%	36.4%	0%	0%	32.1%	18
	d	網干島	32.0%	18.2%	8.3%	0%	19.6%	11
	e	沖ノ島	12.0%	9.1%	0%	0%	7.1%	4
	f	弁天島	16.0%	0%	0%	0%	7.1%	4
	g	沼島	8.0%	9.1%	0%	0%	5.4%	3
	h	小豆島	8.0%	0%	0%	0%	3.6%	2
	i	伊島	0%	9.1%	0%	0%	1.8%	1

2) 時期区分別の認識範囲

表-2 に示す時期区分別のランドマークの描写頻度に着目すると、総じて第1期において頻度が高く、時代が下るにつれて段階的に種類と頻度が減少する傾向がみられた。特に第4期において描写されたランドマークは、「門崎」と「裸島」のみであった。これらの描写されたランドマークをもとに、時期区分別の風景の認識範囲を地図上に図示した(図-4)。その結果、海峡中心から南北約80km、東西約30kmの四方に拡がりが見られた第1期と比較すると、第2期は徳島側の北面・南面の認識範囲が大きく削られ、第3期は海峡の視線と平行な東西方向のみの認識範囲となり、第4期は海峡最狭部の2~3kmの範囲のみとなった。

これは、時期区分ごとの視点場の変化に伴い、ランドマークの視認性が異なっていたことや、主題とする構成要素が変化したことが影響したと考えられる。図-5 に代表的な視点場からの絵画とランドマークの描写状況を示した。「鳴門山展望台」からの「山水奇観(No.15)」において、多くのランドマークが視認され描写されていることに示されるように、第1期では標高の高い展望所からの名所図会など、地理的案内を目的とした絵画の性格が風景を広域的に認識させたと考えられる。これに対し、第2期では図-5の「諸国名所百景(No.28)」にみられるように、標高が下がり岬地形により北面の眺望が遮られる「お茶園展望台」などへの視点場の変化や、渦潮など海面レベルの主題対象への変化により認識範囲が狭まっている。また、第3期は、淡路側の「門崎」などの視点場の登場がみられた反面、徳島側ではより標高が低く渦や裸島などの主題に近い「千畳敷展望台」や「裸島正面」などへ視点場が変化し、「鳴門山展望台」からの絵画と比較すると、遠景に描かれるランドマークが限られていることがわかる。さらに第4期では、「海上」からの渦潮への主題の特化によって、認識範囲が海峡最狭部に集中したものと考えられる。

図-4 時期区分別の風景の認識範囲

鳴門山展望台

第1期：山水奇観 (No.15)

お茶園展望台

第2期：諸国名所百景 (No.28)

門崎展望台

第3期：秋津百景 (No.38)

千畳敷展望台

第3期：阿波の鳴門 (No.39)

裸島正面

第3期：鳴門 (No.45)

図中のアルファベットは表-2のランドマークを示す

図-5 代表的な視点場からの絵画とランドマークの描写状況

(4) 時期区分別の鳴門海峡の風景認識

第1期である江戸中期から後期は、伝統的な山水画から近代絵画への過程で、実景に基づいた科学的な風景画へ移行した時期⁴⁷⁾であり、特に徳島藩の絵師であった鈴木芙蓉の作品群 (No.3-9)²⁴⁾や、後世の鳴門海峡の絵画へ最も影響力が大きかったとされる²⁾淵上旭江の「山水奇観 (No.15)」(図-5)により、鳴門山展望台等からの俯瞰した写実的風景が美的価値の高い見るべき風景として定型化したといえる。また、図-6に示す「茶屋と宴を楽しむ人々」「旅人」などの描写や、「小豆島の島影」にみられるような地理的隔離のあるランドマークの描写より、由緒ある山並みや島、遼遠の陸影なども含めた大パノラマの風景を一望する体験に、鳴門海峡の風景の価値を見出した時代と考えられる。

第2期では、それまで鳴門海峡の風景認識に存在しなかった、海面に自らの視座を仮想し²⁾渦を主題に海面を水平に捉えた歌川広重の「六十余州名所図会 (No.26)」(図-1)の発刊が大きな影

響をもたらしたと考えられる。以降、比較的認識範囲の広い雄大な地形を背景に、うねりや渦など躍動感のある渦潮を主題にしながら、帆船や黒松など画趣あふれる要素を好んで取り入れる形で、二代・三代広重 (No.28,31)、あるいは全く別の視点場の淡路側でも視座を低めに渦や岩肌を主題に捉え、広重の影響を受けたと思しき版画「日本名所阿波鳴門之圖 (No.30)」(図-6)なども発刊され、「鳴門海峡の渦潮」の象徴的な風景を大衆に広めた時代と考えられる。

第3期における名所図をめぐる背景として、近世から継続して描かれてきた対象の減少が示唆される⁵⁾ように、本研究においても第3期より第1期で好んで描かれた全景構図が消失し、視点場の見直しや追加といった同様の変化が確認された。しかし、主題対象や構成要素の結果より、近代化に伴う人工的な要素の増加⁵⁾はみられず、渦や裸島を主題としたものや、むしろ自然を詳しく観察した渦と湧昇渦の描き分け (図-6)や、木船によるワカメ

茶屋と宴を楽しむ人々

第1期：阿波名所図会 (No.16)・部分

旅人

第1期：阿波名所図会 (No.16)・部分

小豆島の島影 (右上)

第1期：淡路国名所図会 (No.23)・部分

淡路側から渦潮を捉えた版画

第2期：日本名所阿波鳴門之圖 (No.30)

渦 (右上) と湧昇渦 (左下) の描写

第3期：渦まぐ鳴門 (No.42)・部分

木船によるワカメ刈り

第3期：鳴門 (No.48)・部分

図-6 各時期に特徴的な表現

刈り (図-6) などの前時代的要素に特徴を有した。これは、西洋の風景観による自然科学的見方の獲得による影響⁷⁾に加え、観光客誘致を目的とした鳴門公園の改修 (1906 年) や観光船の増便 (1922 年)、裸島への栈橋の架橋 (1913 年)⁸⁾ など、主題とする渦や裸島をより近く認識できるようになった反面、日本八景選定 (1927 年) や名勝指定 (1931 年)、瀬戸内海国立公園編入 (1952 年) に至る景勝地や自然風景地としての価値をめぐる動きなどの影響を受け⁹⁾、鳴門海峡の新たな自然的風景を模索する風景認識があったものと推察される。

第4期では、近代日本画の巨匠奥村土牛の傑作「鳴門 (No.50)」¹⁰⁾ に代表されるように、多くの作品が海上から渦を主題に表現した作品となっている。この時代は、高度経済成長を背景に観光旅行が活発化⁸⁾ し、当時の観光ガイドには「鳴門海峡でクルーズを始める予定 (1947 年)」や「遊覧船が毎日出発している (1959 年)」などの記載がみられる¹¹⁾ ことから、観光船による渦潮観光が主流化していたことが風景認識に影響したと考えられる。また、鳴門海峡を横断する送電線の完成 (1961 年)、鳴門公園にドライブウェイ完成 (1961 年)¹²⁾ などの海峡周辺部の開発に伴い、陸域の風景が損なわれていったことも影響した可能性がある。いずれにせよ、この時代には観潮船から間近に捉えた、渦そのもののダイナミックな風景が、鳴門海峡を象徴する風景として認識されていたといえる。

4. おわりに

本研究では、鳴門海峡を描いた絵画を対象に、その構図や視点場、描かれた構成要素や地理的な認識範囲の変遷を明らかにした。その結果、江戸中期から現代に至るまで大きく4つの時期区分がみられ、時代とともに描かれる構成要素が変化し、認識範囲が狭くなる傾向がみられるなど、時代ごとの風景認識の特徴が明らかとなった。現在、海峡中央には大鳴門橋が架橋されており、鳴門海峡の風景に大きな変化をもたらしていると考えられる。本研究で得られた風景の特徴や風景認識が、どのように継承されているのかについて明らかにすることが今後の課題といえる。

謝辞 本研究の着想に際しては、兵庫県立人と自然の博物館の中瀬勲館長をはじめとした兵庫県の鳴門海峡の渦潮世界遺産登録学術調査委員会、兵庫県淡路県民局、株式会社ヘッズの皆様、資料や情報提供に際し、徳島県の「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査検討委員会、鳴門市教育委員会、徳島市立徳島城博物館、飯田市美術館、山種美術館の担当者の方々にご協力いただきました。記して謝意を表します。

引用文献

- 1) 鳴門海峡の渦潮世界遺産学術調査検討委員会 (2017)：鳴門海峡の渦潮の学術的価値及び今後の学術調査の方向性に関する報告書：兵庫県, 80pp
- 2) 大久保純一 (2017)：江戸時代絵画に描かれた鳴門海峡：「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査報告書～文化編～, 27-38
- 3) 鳴門市史編纂委員会 (1971)：鳴門市史別巻：鳴門市, 1330pp
- 4) 横村洋介 (2018)：鈴木芙蓉の新作作品を巡って (二)：飯田市美術館 研究紀要 28, 7-22
- 5) 大宮直記・下村彰男・熊谷洋一 (1995)：名所図会・百景にみる近代以降の東京における「景」の変遷に関する研究：ランドスケープ研究 58(4), 429-437
- 6) 西邑雅未・黒田乃生 (2016)：近世絵画にみる筑波山の特徴：ランドスケープ研究 79(5), 565-568
- 7) 大竹実美・山本清龍・下村彰男 (2017)：絵画にみる三保松原と富士山との関係の変遷と現代の風景認識に関する研究：ランドスケープ研究 80(5), 569-574
- 8) 佐藤正志 (2017)：「観光地・鳴門」の形成・発展とメディア：「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査報告書～文化編～, 220-241
- 9) 西田正憲 (1998)：瀬戸内海における定数名所・観光地等の変遷：ランドスケープ研究 61(5), 395-400
- 10) 山種美術館学芸部 (2010)：山種美術館所蔵 奥村土牛 作品集：山種美術館, 151pp
- 11) モー-ton 常慈 (2017)：西洋人の目からみた「鳴門の渦潮」：「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査報告書～文化編～, 316-343
- 12) 鳴門市史編纂委員会 (1999)：鳴門市史現代編1：鳴門市, 1146pp